

江川アユ種苗生産指導

松本洋典・堀 玲子¹・山根恭道

1. はじめに

江川漁業協同組合敬川アユ種苗センター（以下アユ種苗センターと略）では約10年間種苗生産が不調であった。そこで、生産不調の原因を究明し、それらの問題点を改善することにより、種苗生産を安定させることを目的として密度の濃い調査指導を、昨年に引き続きおこなった。その結果、生産尾数は303万尾で、生産予定尾数（300万尾）を満たしたものの、今後安定生産を継続するためには、以下に記す点に重点を置き指導する必要があることが分かったので報告する。

2. ワムシの生産量と収容仔魚数

昨年、収容すべき孵化仔魚数を800万尾と算定し今年度の生産に臨んだが、担当者の不安から予定よりも多くの採卵を実施してしまい（計画1200万粒に対して1800万粒）、結果として餌不足を招いてしまった池もあった。またワムシ培養に関して、拡大培養の段階において人為的なミスが重なり、ワムシの供給も十分とは言えなかった。

次年度は人為的なミスをなくし、ワムシの生産量130億/日を満たすこと、さらに昨年目標とした収容孵化仔魚数800万尾への軽減を指導の目標とする。

3. ワムシ主体の飼育と配合飼料主体の飼育での換水法

本年度生産の目標とした「ワムシ主体の飼育から配合飼料への切り替えに際して底掃除をおこない一気に流水飼育に切り替えること」については、各池ともおおむね実行できた。また、アンドン型ネット排水装置を池の中央部底面に設置して、効果的に底水を排水する換水法も定着させることができ、孵化後30日以降は順調な飼育を実現させることができた。次年度はすべての池にアンドン式排水を導入して、さらな

る生産の安定化を図る。

4. 出荷時期に合わせた飼育密度の設定

早期に出荷する予定の仔魚は低密度飼育（2,000尾/m³）により成長を促進する。それ以外の仔魚は高密度飼育（6,000尾/m³）を行って成長を抑制し、その後早期出荷により空いた水槽に分槽することで成長を調整するなど、水槽の仔魚の収容尾数を出荷予定時期に合わせて変化させ生産性の向上を図ることを指導する。

5. 飼育状況の観察

計画的な生産が実施されているかどうか、給餌量や残餌量および成長の状況などについて毎日データを収集し検討する必要がある。平成22年度から指導した「飼育日誌」の導入により、それまで気が付かなかった問題点や担当者の過誤などを洗い出すことができ、大きな失敗を未然に防ぐことにつながっている。今後も飼育日誌記録の励行と、日誌記録の分析を指導することとする。

6. 関係者間の情報の共有

平成22、23年度には週1回、飼育の現状や問題点について意見交換する場を設けて、生産する上で注意すべき点や問題点を職員全員が共有した。これにより、責任者が不在であっても適切かつ迅速な対応ができた。今後もこの指導を継続する。

7. 天然親魚からの採卵による種苗生産

早期に種苗を出荷するため、これまでは累代飼育された親魚を用いて早期採卵を行っていたが、平成22、23年度は天然親魚からの採卵のみとした。結果として両年とも遡上力に優れた活力の高い稚魚を育成することができた。今後も天然親魚からの採卵による種苗生産の実施を指導することとする。

¹ 島根県浜田水産事務所